

両立のススメ

岩手医科大学 小児科 赤坂 真奈美

11歳の時に父が他界。主治医は“子供達も小さいし、お父さんも若いのにお気の毒です。”と、我々家族にも配慮した言葉かけをしてくれました。その医師が自治医大出身であると知り、私も同大を目指し弱い人の心に寄り添える医師になりたいと思いました。以来なんとか医師を続けています。

幸い理解のある主人と出会いました。ずっと勤務地が違い、単身赴任で、私にほぼ休みがない生活に文句も言わず協力してくれます。長男を妊娠したのは、一人診療所の時。まだ義務年限中で医局とは縁がなく、具合が悪くてもどこを頼ればいいのか分からず、仕事も休めず、無事に出産できるか不安でした。次男妊娠時は、新生児、重症児と毎晩呼び出される超多忙な中核病院の一人小児科長。妊娠中は体調が悪く、ミスしたらどうしよう、患者さんや他の医師に迷惑をかけるのではないかと弱気になりました。責任感が強く、完璧に育児や仕事をしたい女医さんほどやめたいと思うのかもしれませんが。

近年女医さんの待遇は改善しつつありますが、選択科や地域で差があります。医師不足の岩手でも、安心して妊娠期を過ごし、職場復帰できるよう協力は惜しみません。妊娠・子育て中の女医さん達も権利ばかりを主張せず、できることを精一杯やり、夜間や休日、産休中をカバーしてくれている先生方への感謝を忘れず頑張っていれば、きっとみんなが認め、両立を尊敬してくれます。

現在私は義務年限を終了し、常勤での大学勤務7年目。当直は月に3～4回（勤務当初は7～8回）、月の半分は小児神経のオンコールです。長男は小さい頃から多忙な私と一緒に料理をして（させられて？）育ち、今では私よりおいしい食事やスイーツを作れます。次男が小さい頃は、私が当直や呼び出しで夜間病院に出かけるとき、いつもベソをかいていましたが最近は、“お母さん、カッコイイね”とほめてくれます。朝の弁当作り、学校行事、クラブ活動、PTAに子供会。当直明けでも容赦なく日常が待っていますが、子供達のおかげで仕事以外の視野が広がり、毎日忙しくても小さな幸せでいっぱいです。

（2013年8月記 所属はホームページ掲載時）

あかさか まなみ

<著者略歴> **赤坂 真奈美**

岩手医科大学小児科 助教

平成 5 年 自治医科大学卒業

整形外科の夫(単身赴任、自治医大の同級生)と中学 2 年生の長男と小学 5 年生の次男

～男女共同参画推進委員会より～

「くるみんマーク：職場の環境整備」

「くるみん認定」は、仕事と子育てを両立できる職場環境の整備に向けて、行動計画をたて公表し、目標を達成するなど、一定の要件を満たした企業等からの申請により厚生労働大臣が認定するもので、平成28年6月末時点で2,570社が認定を受けています。この中には大学や医療機関も含まれています。昨年度からは、特に高い水準の取組を行っている企業等への「プラチナくるみん認定」も始まりました。

小児科医が仕事を続けながら家庭人、地域人として生きていくためには、組織全体の目に見える取組が必要です。そのため、日本小児科学会は、日本医療機能評価機構に対して、医療機能評価において男女共同参画推進に関する項目を充実するよう提案しています。